鐵格子通信　十三通

—鐵より—

（一）同人諸君へ！

◇ 諸兄の辛勞を遙かに深謝する。

◇ 俺はマメ　斃れるまてヤル。

◇ 「來年の事を言へば鬼が笑ふ」かな——

豫告は種々の都合に依つて變化するかも知れぬが　豫告でない豫告として豫告しとく分には差支へあるまい!!

◇ 今の所、面黑い論文を發表する事の出來得ないのを遺憾に惟ふが諦められぬと諦める?!

◇ 今後の健闘を切に希ふ。

——一九二五、一一、一——

鐵

（二）讀者諸君へ！

◇ 俺のモノは所謂藝術ではない　藝術ではないのだからそのッモリで充分ケチをツケてみてくれ！

◇ 俺に對する（藝術上、思想上、行動上）總有挑戰の布告は直接「大阪北區刑務支所、中濱哲」宛に享ける。

◇ 惡口雜口、罵詈嘲笑、皮肉揶揄等等をドシ〳〵飛ばしてくれ！決して默殺はしない、必ず適當な方法で鐵格式にお答へする。

◇ 敵味方を論せず遙かに健闘を期待する。

——一九二五、一一——一——

鐵

武田兄

引越したやうですね。大したゴテ〳〵さへ無ければ、家を變るといふことは非常に好い事だと思ひますよ。第一、新氣一轉、可厭な仕事にも勵みが出てハカが行くでせう。假令それが當分の間だとしても。

又、大阪中の何處に如何いふ露地や小路が潜んで居るといふことを知つて置くだけでも、いざといふ時には隨分な取得になる譯ですからね。

兎に角、プロレタリヤだつて何か得る所が無くちやさう〳〵何時までも安閑と生きても居られぬ——と言ひ度い所ですね。はつははは

先づ、さう言つた物好きな意味で、僕は既往七年間の裡に、東京中の各區と府下の各町村に、轉々、殆んど知らざる所無きまでに住んで見たのですが、その癖、震災の時なんか例の旅行癖が祟つたのか、大阪くんだりに迂路ついて居て、少しもその殊勝な靈驗があらたかではなかつたのです。と言つた樣な調子なんです。ひひひひ——。

變なコヅツケの憶ひ出ですが世の中は、却々俺達の好い方には、問屋が思ひ通りに卸さんと見ねますね。骸子の目は孰方に輯んで行くのか彼奴、全く皮肉な奴ですよ。ふふふ——。

大さんも愈々旅立つらしいが、此の頃の昊天の標に清澄な態度で、往生際に臨んで居る彼の個性の明快さを遙かに想ふと、僕は沈痛な靜重な微笑に誘はれますよ。彼の亡き後の慰藉は、總有方法で出來得るだけしてやつて欲しいと希つてる次第です。これは關西同志諸君一般にお願ひします。

界に下つた連中から便りが有りますか？兩人の身體は大丈夫でせうが他の兩人が如何だかと思つて、一雨々々、寒が加つて來る度に、これから先の彼等の永い慘苦を偲ぶと私がに掛念されます。だが人間の定命なんてものは、單に肉體ばかりで量る譯にも行くまいから、あれで案外執念深く、アノ兩人が圓々と肥り太つて堂々と大手を打ち振つて出て來るかも知れませんれ！へへへへ——。

僕の婆心を裏切つてそんなことにでもなつてくれゝば隨分痛快ですがと毎日祈つてる——如何だか？

序の時に僕から宜しくと傳へて下さい。

久さんも大分遠くに行つたらしいですね。彼方は寒國で少々初めのうちは凌ぎ苦いかも知れないが彼のことだから又何とか自淵の途を開拓して最後まで雄々しく進んで往くことでせう——。彼にも便りする折があつたら吳々もよろしく。

擔ぐ譯ではないですが、彼にしろ君とこの兄さんにしろ、姓名學から僕が感ずるに、幸運な結果が得られさうですよ。ふつふふふ。まあ誰にしろ二足獸は何時まで經つても、「時」の奴隷から足を洗ふ譯には何かんのですからね。この濱鐵哲學は、句駄羅ない說だが一寸踏める面黑い話だとも惟へるでせう？　はつははは。——

今、仕事が一段落着いたのでホッとして、黃昏れ往く空を恍惚と眺めてたら、赤い蜻蛉が交尾し乍らさも心地好ささうに飛んでるのを見つけたのです。少々季節遲れたが、こんな自由な行動は苟も萬物の靈長とか自惚れてるテメエ達には夢にも眞似は出來めい——つて言つた

具合なんですから全く參つちまひましたよ。何だが樣つたい氣持になつて微苦笑を洩らさずには居られなかつたのです。又、今晩は二時頃まで山が入りますまい。ひひひひひ――。

まづこの通り僕は健在です。笑つて安心してくれ給へ。諸君によろしく。では又。

時に「又公」は下の病にでも取つ附かれて屁古垂れてるんぢやないですかね？彼の童貞は當てにならんもんぢや。ふふふ。一向、音沙汰が――無いが會つた折にさう云つてくれ給へ――

「用事が無いのだつたら白面のハガキでも好いからタマには一枚位カツ飛ばせろつて――へへへ。

どんなに平氣に構へて見ても、顏が歪んで來るやうに囚徒の心は僻んで來るやうです。ほほほほ――。妄言多罪。

十一日　薄暮　　鐵

別れだと思つてたら（？）檢事控訴で又當分居据りの食客、甚だ飽ツ氣ない慰太樂だが今度は面白くなるたらう然し又厄介をかければならぬかと思ふと恐縮するが仕方がない面倒見て貰ひ度い成る可く早い方がいゝが金のかゝらぬ樣に左の品を願ふ。

一、本（鏡花全集及英かエスかの原書、又は雜誌類）

二、浴衣、帶、ハミガキ及ブラシ（取下げの分でいゝ）石鹼、タオル等。僕は後でもいゝ他の逢中に早くしてやつてくれ。匆々

六月五日

逸見吉造
生島繁　樣

北區刑務支所　中濱哲

◇昨日話した個人雜誌發刑の事、夢ぢやない、現實だと斷定してかゝる、去年の夏あたりから見續けて來たあんまり永い幻だ、せめてイマワの際に陽炎にでもなつて躍つてくれねだア！

◇所謂具體的に謂つて見ると斯うなんだ――人が一人死ぬる――と、其の人を少しでも知つて居たとか云ふ奴等が己の自惚れを標準にして彼の善價惡價を喋々云々する、だがそれが何んだ！灰に化つた彼にとつては全くラチかれねやだ！片腹痛くも何ともれねだ！灰だもの！土に歸るばかしだ！

◇賞めるのなら呼吸のある裡に彼の耳の傍で聽かしてやれ！目の前で見せつけてやれ！讃められて嬉しがらない奴はマア居ない筈だ、只、ゾク〳〵する程嬉しがるか、フフウンとお高くとまつて默つて嬉しがつてるかの性格の相違だ。

◇全ての價値は幻だ――なんて悟つて誤座る所謂ニヒリストにした所が惡口を言はれたり書かれたりするとムキにならむまでも逢磨相應に怒る所を見ると矢ッ張り讃められると默つて悅んで座禪を組んでゐるに違ひない。

◇たから惡口にしろ彼が骨に化らぬ前に刺す樣なシンラツな奴を戛ッ飛ばすがいゝのさ、死に往く彼がブル〳〵ゾク〳〵する樣な、或は又世と隣でフフウンと微苦笑位は零すかも知れむ位の惡口を――間の奴

等にセンゲンする所以ではある、それも幻か？幻なら如何つていふんだい？フフフフフ。

◇さつぱり具體的でなく埒が明かないがまあさう云つた樣な意味合ひでこの話を進めやう――大體個人雜誌なんてものはハタから見ると如何にもエゴイステツクなバイメイに映り勝ちなものさ、でなかつたら誰も相手にせぬ逃避的蠢動と誤解され勝ちなものさ、勿論、何も出來ない奴等がヤク加減もないこともないが。遠くは有島君の「泉」近くは加藤君の「原始」なんて皆さうだ。

◇前者については彼が死の行軍に出發する前日、彼の心裡を露知らずに、俺は先の樣な異見の誤託を列べに突つ込んだものさ、所が彼は「獨斷者の對話」といふのを熟く讀んで見てくれつて、最終刊の「泉」を俺に手渡したつけ！其の時兩人は虛無の雌雄について語り合つた、アノ時の彼の眞意を俺は今思ひ出さずには居られないのさ。

◇「原始」に至つては最初俺の注言を容れて直ぐ讀者欄を設けたことはアノ通り、又（後に至つては）現今では他の連中の作物までも發表する樣になつて居る、無論手の廻り兼ねるセイもあらうが――。

◇これらは決して有島、加藤の兩君がエゴイステツクなバイメイ家でもなく、逃避的な蠢動屋でもなく黑い一點を凝視め乍ら勇敢に死と闘つた或は闘ひつゝある眞箇の自我人――或は一種のニヒリストとでも云ふのか――であることを示して居るのだどうだか！ハハハ――

◇所で俺の場合は如何だ？思ふことだけは却々殊勝だよ、何代ろ思索することはタダだからね、初め「檻」とか「鐵格子」とかいふ樣なもので全國的に囚人同志の雜息を聚めてやつて見たらば嘸面黑いものが出來上るだらうと思はんこともなかつたが、そんな馬鹿氣た（？）事を相手にする奇德な誤人は牢屋の外には半人も居さうにもないしね。

◇但し、戰線同盟組織前後の事だつたから或は君も知つてるかも知らぬがその昔、平公高尾が「公平會」といふのを作つて河野廣中や後藤新平や高極義信なんていふ所謂前科者の政治屋運を誘ひに行くが俺にも一所に來ないかつて計つたことがあつたが、その熱心さにはホトホト寒心したが相憎く其の頃俺は未だ前科者なんていふ正札がついてゐなかつたからフフンと一笑に流した次第ではあつたが、今、思ふと矢張り彼は活眼の持主であつたよ。

◇閑話休題――それならば此所に居る同志だけに縮めて見たら如何だらうかつてなことも思つてはみたがそれこそ縱令誰かゞ引き受けて出してくれるにしても、さうして出來上つた雜誌なんか決して俺達のお目にはブラ下がれまい、そんなことなら尙更ら拙らないこつされ、囚人根性つて奴は君も熟く知つてるやうに、淺墓極まるものさ、無駄骨は爪の垢ほども折り度くはないかられ、餘儀ない次第さ。

◇矢ッ張り誰か俺を熟く知つてる者が引き受けて俺個人の雜誌を出して見やうと云ふ怪體な奴を探すよは他はないと思はんこともなかつたよ。

◇さうなると彼はあんりタタカク止まつてエラ過ぎる、その癖、中味は腕も腦もないのかも知れない？、又、彼はあんまりイイ、ダク〳〵でその癖少しもハカドラない、といつて この俺自身でそれをやつてのける譯にも行かんし、外に居るんなら雜誌になんかカマケても居られない性分だし、なんてエラさうに指折り物色した事ではあつたことよ。

◇居た！居た！君が居る！矢ッ張り君だ！この仕事をやつて貰ふには

と思つたことではある。

◇利用する！利用される！謂ひたい奴等は何時でも何事にでも難癖をつけて結局何も出來はしないのだ！相互に知りたくない所は知らなくたつていゝさ！眞に知つてる所がたつた一つ、只の一つ有りさへすればそれで澤山だ！それを根深く堀り下げて行けばいゝのだ！それでいゝんだ！それでいゝんだよ。

◇これで愈々幻だつた濱鐵の個人雜誌も君を得て產れる秋が來たのだ！どうせ先は見にてるのだ！セイ〳〵樂しましてくれ！ハハハ、先が見にてるから產むんさア！か？アツハツハハ。

◇總て以下の事は君と俺とのみの對向だ！決して他人に喙を容れさせまいよ、この所、誰が後に何と言つたつて二人のデイクテエタアシツプで育てたいものだ。——自我の最高潮でいゝぢやないか、或はステイルチルの所謂組合だなんて笑ふ奴があるかも知れんが笑はせろ！笑はせろ！屹度目新しい所をお目にかけるから惚れてヤクなよだア。

◇君が臺所の安定を引き受ける——賴むのぢやない自發的にだ俺は努めて精々した原料を製造する、それだけの自覺と自責さへあれば屹度ピリツ！キリツ！とした奴か生れるよ。

◇二人以外には誰をも必要としない、唯世の中の奴等は食手になつて出來上つた品を味ひさへすればそれでいゝのだ。結構な惠まれたる位置かな、五十錢位はハリコメと怒鳴りたくなるよ。

◇さて表題は、「黑パン」「黑死病」「無風帶」「鐵格子」——以上の四ツの中から選んで名付けたいと思つて居る、列記した順序が即ち俺のスキナ程度を示してゐるのだ。

◇宣言とか卷頭言とかは既成雜誌の傳統に唾をヒツカケてやらう。

◇內容は「ロヂ裏」「チヤブ臺」「ゴミ箱」「クツ籠」「パン屑」等の大手搦手から、論文、隨筆、戲曲、小說（長篇連載物コント物）詩歌等をウンと詰め込むことに構想はチヤンと出來てゐるのだ、いくらでもあるから——大凡雜誌の一つも出さうとする者は三ヶ月乃至半年分位の確定原稿を備へて置かなければウソといふのか俺の持論さ、勿論、時事問題は虎の子の如くとつておくのは判り切つたこつさ。

◇と云つたつて、何と言つたつて編輯後記は君の領分さ、と同時に君に必要なだけ君の繩張りを擴張しさへすれば言ひたいだけの事は書けるだらう。

◇發行部數は編輯長兼發行所長兼印刷部長である君の胸で定めること其他廣告費なり何にまれ苟もマヂエに關する事は一切俺には知らせてくれるな、俺は只當一記者で甘んずる者である、どうせ損を見越して君が捨てるゲルだ、クタビレ儲け以外に利益をドガイ視してチヨウゼンとやらうちやないか俺の爲めに。

◇やり切れなくなれば止めるまでのこつさ、だが然し始めるとなつたら俺が此所に居る間（今年一杯か來年を跨げても一二回より多くは出でない）位は續け度いと思はんこともない、それ位の腹案を最初確乎と立てゝ見てくれ。

◇途中さへウマク運べば月一回は完全に樂々と出せると思ふ、尤も來月（創刊）號は月半ばになるだらうし、新年號を早目に出すとして、今年中に三回だ、それ以上來年のことを言へば鬼から笑はれる位がオチかも知れないがセイ〳〵三、四、五回位の見當でかゝることにする

◇君も本職があるんだからこんなことにばかりカマケても居られまいが、紙型と頁數さへ定まれば假編輯位は俺の方から一纏めにして出す

やうに心掛けるがらそれから先の事は不悪全部君に面倒を見て貰はなくちや！

◇寒くなつて來た、飛び步かればならぬ君の健康が氣になる、ハテ、マメでやれるかなア？俺は大丈夫だ、冬になると肥るタチなんだから然し一寸先は常に暗だ！それこそ古い譬喩だが死物狂ひで書きなくつて見やうと大童だ！全くの所、死一邊だかられ、アハツハハハハ。

◇餘は面談の上にて——。

十月廿日

孝兄皮下　　鐵

來信　—鐵へ—

中濱　鐵君

江口君の、哲の詩の紹介は未だ新聞にのりません。發表され次第にまとめて、御注文どほり差入れいたします、「鐵の墓」詩集は皆で奔走してゐるが、どうしても秋頃になりそうだ、和田、江口、加藤、の諸氏が今一生懸命に本屋へ掛合ひや宣傳に骨折つてゐるが、思つた通り早く出版されぬので氣の毒だが、當分諸氏に萬事まかしておいてくれ、キツト面黑い、鐵の墓が出來上る俺もまた此の頃病床に轉々してゐるから、君の共同墓地へ葬つて貰ふか。

暑く成つて來た獄中の酷苦は隨分烈しからう御體を大切にしてくれ先日高尾君の一年忌が來て、近く大杉の一年忌も來る、早いものだ杉がフランスから將軍の樣な影氣で歸京した日だ。

九月には追悼會でも大々的にやツけて大杉殘黨の意氣でも世間の奴等に見せてアツト云はして來れ樣か杉の自叙傳、獄中記脫出記は本日差入れに送つた、外の本も近い內に送る右用件まで大切に。

七月一日　　村木源二郎

隨分久し振りで手紙を見た、其後何して居るのかといろ〳〵心配して居たが。先日新聞で君が捕つたのを見て、ぢやあ矢張人の噂さに違はす、あつちこつちで金を貰ひ乍ち生活してゐたのだなと知つた譯だ馬鹿げた事件で這入つたものだが。まあ仕方か無いさ。始めての入獄なんだから、ウンと勉强でもやつて來給へ。エスペラントの獨習書は村木が揃へて明日あたり送るだろう。

詩集發刊のことは承知した。江口君や加藤君にも出版に付いて相談して見よう。いゝのをウンと作つてよこし給へ。既に發表した君の詩は。あつちこつちの雜誌の古いのを探してまとめて見よう。大分あつた筈だれ、

無一文はこまつたな。少し何んとかしよう。俺の病氣は昔の通りだが。しかし最近は大いに好い方だ。源兄も先づ同じ事だ。僕は每月二回「勞運」を發行せればならぬので。大忙がしだ。

もう暖いから監獄も樂だろう。惱める魂を春風にそよと吹かせて居るさ、東京は花盛りだ。俺は昨日上野へ花見に行つたよ。獄庭には花は無いのかい。東京の監獄の庭は實に綴麗ぞがなあ。

詩集でも少し差入しようか。それ共くだらないか。

君は昔はいゝ體だつたが。一昨年あたりは梅毒が少し出ていたれ――。今はかう大丈夫なのかい。大切にしろよ。

夢精連發か――あれ程體に毒はないさうだよ。いら〳〵するない。そのうちに好い女の寫眞でも送つてやるが。夢精はよせ。よせ。春風に吹かれて居ろよ。

この頃の婆婆人は皆花に浮かれて居るよ。鈴木文治といふやつが勞働代表とか何とかで「アメリカ」に行くので近く伊勢と桃山に參拜に行くさうだ。春だねは。花盛りだねは。

四月十四日

中濱兄

和田久太郎

今日古田等の判決があつた。裁判所に行つたが、モウ駄目で、歸りに富久町によつて面會した。死刑である。しかし彼は實に澄み渡つた心で、落ち着いてゐる。服罪すると云つてゐる。喜んでゐる。長い間話しをした。昨夜々中に眼をさまして、彼は今その宣告をどんな氣持ちで待つて居るだらうなど考へて居たのだ。

頗る健康で、精神的にも健全だ。僕に小説を書いてくれと云つてゐた本をでも差し入れたいのだが、今すつかり貧乏になつたのだ。その上來客攻めだ。そのうち

九月十六日

加藤一夫

通信（四）

すつかり御無沙汰、餘り御無沙汰したのできまりが悪くなつたんだ勘辨してくれ。

今、和田、古田君等の公判を傍聽に行つて歸つたところだ。今日は主として古田君に就ての調べがあつたが、立派な態度であつた。靜かでそして鋭い性格が實によく現はれた。僕は古田に就ては今まで餘り多くを知らなかつたが。今度の事件で同君が入獄してから時々面會所で逢つたり度々手紙を貰つたりして。どうしてもつと早く友人にならなかつたかを悔んで居る。

先日の君の手紙では控訴はしないと云ふことであつたが。檢事控訴で何れにしても其のまゝ當分居すはりだね。實にベラボーだね。無期でも未だ足らないと云ふのか、今日布施さんに逢つたところ。今度の君等の裁判の時には是非行くと云つて呉れた。

僕も一度逢ひに行き度いんだが。今は大杉榮全集の編輯と校正で全くひどい忙がしさなんだ。しかし今度の裁判までには一度逢ひに行き度いと思つて居る。

古田君は此頃少し健康を害して居る樣だが勿論心配する事はない。和田君其他は非常に元氣である。

君の傳言は古田君に話して置いたが。其後の樣子も知らしてある。ところが。君が生さんに傳言して僕に云つて來る筈だと云ふ其の便りはまだ來ない。どうした事かと思つて居る。此頃は大阪の樣子が少しも分らない。

これを機會に僕も時々便りをするから。君も寄越してくれ。からだを大切に願ふ。

六月十六日

中濱兄

近藤憲二

和田君等の公判は廿七日

軍營から

牢獄よりの通信弄獄の中で確に拜見致しました。

全く久し振りで思ひ掛けない所からの書信に膽を冷されて。おかげ樣で涼味を覺へた。僕の居る所が判かつたと思つた。

平岩君が大阪へ行つた時にでも話したのだろうと思つて居る。兄の消息は風の便りに聞いては居たが。入營してから他の用事が忙がしこので遂に御無沙汰した。同じ島から出て。一方は劍と彈丸に護られる男。一方は劍と彈丸でおびやかす男。變れば變るものだね。いゝの悪いのと云つても僕は二年居れば娑婆の勞獄へ出られるが。兄は未だいつかはつきり分らないと云ふ話氣の毒に思ふ。併し僕は兄の身の上にケチな同情を寄せるわけではない。兄の身の上は明日僕の境遇かも知れない。どつちも今足を×××に掛けて居る身。

まあ――せいぜい生きて居る内に出來るだけ自己に忠實に充實した生命を終らうぢやないか。

毎日〳〵×××ケイコ。全くあき〳〵した。それでも現在の所では非常に我儘を通して居るから樂だ。唯軍隊に居る事それ自體がたまらぬ苦痛だ。が、考へて見るとこんな苦痛は誰でも經驗したものだ。否誰でももつと〳〵以上の死の苦しみを受けて居るのだ。僕は敢て弱音を出すまい。何所へ行つても我等の仕事は有る。出來る丈け僕の最善を盡して戰ひ又運動を起したいと思つて居る。

兄の云ふ通り全く色氣と食氣の本能生活に成りそうだが勉强だけはして居る。

折角くれだ手紙もそつちで切つたか當方で切つたか半分程切取られて居るので充分讀む事が出來ないのが殘念だ。

今は何だか知らないが馬鹿に文學方面に心が向くので。無理に小むづかしい理屈は讀んでも仕方があるまいと思つて文學方面に向つて居る。其内に何か書いて見たいと思つて居る。出來上つたら御目に掛けませう。

僕は夏痩性で今年も相變らず夏痩せした。僕の夏痩せは麥飯では駄目らしい。營倉も當分御無沙汰して居る陽氣がよくなつたら又行かうかと思つて居る。

戰線同盟の高野松太郎夫妻、石黒君等にはよく會ふ宜敷傳へて居る又、精しい實狀を知らせて欲しい表記の場所へでは失禮する

濱哲兄

仲西

中濱君今日まで機會がないため遂に會ふ事が出來なかつた。今になつて殘念でたまらない。

誌上で君の事はよく知つてゐた勞運でもよく話してゐたし加藤（一夫）さんも話してゐた。

ところが入營してから然も營倉で麥飯と鹽をなめて虎箱の中でゴロ

ゴロしてゐたとき橿原中佐が來て君の在營當時の事などを話した。(それから三日目に死んだがところが)五、六日前の豫備が入つて來て君の事を話し合つてゐた同年兵だと云ふ人も五、六人居るやうである

が君がよく行つて本をよんだと云ふあの酒保の藤棚の下に古びてはゐるが椅子がまだ殘つてゐる。

俺も入營してから十月にもなる。おそい樣で早いものだ。

毎日×××强ひられてゐる。やる氣がないのだがやらせられるとうまくなるものと見ゐて今では相當自信もついた。

まだ一年ある。みつちりやつたら上達するたらう。

支那にやつてくれと毎日中隊長に話して見たがあつさり斷はられたその都度君の事を例にとる。

支那には行けず演習(野外)には出さない、(本を讀むにはいゝが)來年一年如何にして暮さうかともがいてゐる。

けれども君の事を考へると氣が狂ひそうになる。一思に死んでくれとも言はれまい、まあ——健在で

元自然兒聯盟　井上重一郎

農村から

八月二十八日に送つた雜誌「土」とハガキ落手と思ふ。(その五六日前にハガキを送つたが)廣島縣の北海道と言つてもよいこんな山奥で出來たのだから拙さ加減は話にならない程君の原稿を載せるのが惜しいやうだ。許してもらひたい。だが今後はもつともつと力を入れやう各地の同志からの聲援に對してもやらなければいけない。それに今日は雨の日だ。

五六日降り通しだ。今日でまる三日降つた。思出深い。それを思ふだけでもやらなければ。

君にこんな山奥から便りを書く度に不滿足に思ふのは僕の思つたこと、意中が全部書かれない事だ。「土」一重が呪はしい。

こんな平凡な便りでまことにすまない。ま黑き土くれの中からたぎり出るやうな情熱を持つて筆を持ちながらも「土」一重を思ふと書けなくなる。

土社では三日目の雨の日に皆が寄つて本を通じての思出話をやつた君のことも話に出た。

君の偉大な頑丈な、押し付ける樣な、當つて碎ける樣な赤黑い心より生れた文々と、稀に見る天才だとの評、誰もが同感だ。

こうした雨の夜君も雨に見まはれて思索に耽つて居る事だらうと思ふ。

「祖國と自由」の「警鐘を撞く」實にいゝ皆の前で僕が讀んで聞した。かつしりした體格の胸板を叩く樣な氣持ちがする。

「土社」としてすこし君に贈る、まことに本代としては少ない、僅かの酒杯にすぎないかも知れん。

も少し送りたいが仕方がない。

ハガキ代にも足らんこの若干を心よく使つてくれ給へ。

奴らの搾取・剩餘から生れたのではなく土くれの結晶だから。

奴らに奪はれるのが殘念だ。

若し入るやうな事があつたら云つて吳れ給へ。何とか工面する。

あゝ共に暗涙に咽ぶか、否涙を振つて進まう。君の健康を祈る。

九月十六日夜

中濱哲兄　　土社　剛

今日の手紙で實は地團太踏んで怒つたり泣いたりだ。せめて僕にだけでも見せてもよからうにと、その「不許」に成つたのが殘念で仕方がない。君らが下獄仕樣としたときその報を知つて直ちに書を飛ばした。ひよつとしたら届かないかも知れないと懸念して。それが不幸にも檢事控訴によつてかすかにこうした通信を續ける事が出來たが況して今後共に短い日時の交通なのだから僕等にだけ通信として許して貰ひ。絕體發表しない樣にすると云ふ約束の下に「土は黑村である」の發送を許可して貰いたいと今君への手紙と同時に刑務所長宛に歎願に及んだ。譯だ許されるかどうか。

あの「土」だつて周圍からの熱心な要求に依つて、あんな下らないものにしてしまつた。僕の責任は輕からずだ。むしろパンフレットを出したいと思つて居る。印刷屋に掛けて一部五錢位のものを。だが何れ君との不自由午らにした交通も長くは有るまい。その間でもよいその間だけは僕のあるだけの力を入れて立派に育てゝ行きたい。

もう秋だ。稻も熟れて來た。

茸狩りもやり始めた、秋だ。放穫時だ、レイモントの「農民」の秋を思ひ出す。寒さも解つて來る君の所も特に解るだらう秋を想はすにいい時節だ。勉强時。思索の好時だ、素的な墨よりたぎり立つ樣な詩でも書きたいと思ふが、その詩もお目に掛けられないほどこの頃の僕は落ち付き込んでゐる。生命の飛躍、行動、そんなことはとつくの昔にすぎさつた樣な氣がする。監獄死、そうした迷路を行きつもどりつしてゐる氣が現在の全部である。

又書きましう明日の仕事があるから何よりも健在でコツコツと有意義にやつて行きたまへ、かげながら思つてゐる、面白い詩でも書かつたら僕にだけでもよいから「親展」として送つて吳れ給へ僕も出來得るだけ便りをしよう。さようなら。

九月二十二日夜　　土社にて　剛二

付記　以上の書信は中濱君より同志諸君へ又同志諸君より中濱君への通信の一部だ

外に澤山有るんだが、紙面の都合で殘念だがこれだけにしました。書信の順次も前後まちまちだ　御容赦を願ふ　この次には出來得るだけ多く諸君達への書信を集めて、發表するつもりだ　諸君にして中濱君から來た書信が有れば拜借したい。

終りにこの書信なり原稿はいづれも大阪地方裁判所の中濱君達の係官諸氏及び大阪刑務所北支所長の好意によつて特に檢閲されて僕達へ御下げされた事を一言付記しておきます。

豫告ページ豫告

新年號豫告『黑パン』第貳輯目次

新年よ！さらば！（卷頭之辭）
先づ觀念的ニヒリストを誅せよ！（論文）
愛馬に跨りて（一テロリストの手記）

黑實パン記黨（其二）

3 黑彈（戲曲篇）
第壹部 黑死病（ペスト）菌保有者の群
第貳部 朝食前の一仕事
第參部 女は廻る

鐵扉日詩（夏秋の部九十九）

濱鐵自傳兄弟之卷 逆轉

軍營物語
（一）駐屯兵
（二）露營
（三）重營倉
（四）遺骨護送

獨裁より獨裁へ（戲曲）
第壹部 マラットの最期
第貳部 ダントンの最期
第參部 ロベスピエルの最期

新過去帳覺書（其貳）
（一）山の温泉（感想）
（二）濱の温泉（追憶）
自問自答（讀後感）
其他

刊發旬上月一（壹月上旬發行）

本誌第貳卷二號豫告『黑パン』第參輯目次

濱鐵獨言（卷頭言）
起て！匿名の世界よ！（長詩）
農村と漁村と青年諸君へ！（論文）

黑實パン記黨（其三）

5 黑難（小說篇）
一、彼等の一團と女
二、火事
三、借金の話

軍艦長屋日詩（冬春之部九十九）

人身御供（信越國境探見記）

立ン物坊語
（一）下足運び（三越の地下室にて）
（二）鐵筋運び（丸ビルの露臺にて）
（三）砂利運び（帝國ホテルの冷藏庫にて）

濱鐵自傳初戀之卷 最初に誘ったのは彼女であった

社會講談 大鹽平八郎の最後

老話
（一）捨てる寢るの話
（二）圓くすの話
（三）冷忍の話
（四）莫忍の話
（五）多過ぎの話
（十三九つの中より）
其他

刊發旬下月一（壹月下旬發行）

追悼號？豫告!!!

乞！得て!!

濱鐵獄中詩集 發刊!!

第一輯……黑微笑……(近刊)
第二輯……鐵の墓……(近刊)

中濱鐵全集 發刊!!

應募に關しては次號に詳しく發表します
奮つて申込下さい!!

編輯後記

▲たつた一言！
『これからだア！』

▲豫告の日より發行が遲くれたなんて文句を云ふない。共角出たんだ嬉こんでくれ！

▲次號が出るかつて、そんな事解るもんかい、一寸先は暗だ！

▲ホメ言葉なり、惡口なり云つてくれ！イマワの際だ！よろしくたのむ！

急告!!

共鳴した者は個人又は團体として直接購讀者になつてくれ！

同人の言葉

▲今度保證金を市内並みで納めた、從つて富田林の事務所は廢しました、此後は住吉の方で全部の仕事をやります

大阪市住吉區住吉町一六七
文明批評社

本紙特價 五拾錢

誌代		郵税共
一冊	廿五錢	
半ヶ年分	一圓四十錢	
一ヶ年分	二圓七十錢	

▼本誌の注文は前金
▼送金は小爲替郵券

廣告料は照會次第回答す

大正十四年十二月十七日印刷納本
大正十四年十二月二十日發行
大阪市住吉區住吉町一六七
發行兼印刷者 逸見 吉造
編輯者 大串 孝
大阪市浪速區櫻川町一丁目一〇五七
印刷所 岩出印刷所
大阪市住吉區住吉町一六七
發行所 文明批評社